真宗大谷派
（浄土真宗）
眞英寺寺報

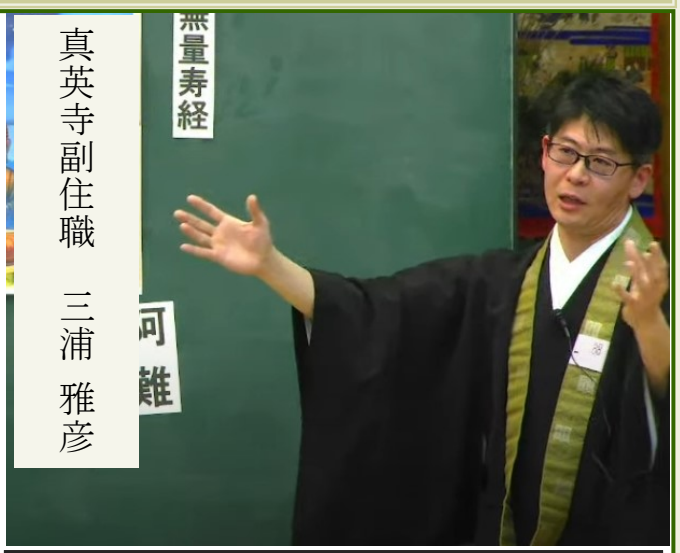
慈現～じげん～

9号
2024年夏

当たり前の日々

本年六月に石川県能登半島の被災寺院を訪れて、解体予定の土蔵から仏具や書籍などを運び出すボランティア作業を行いました。作業の合間にふと本堂内陣を見上げると、お正月飾りがそのままになっていました。あの日のまま時が止まっていたのです。

家族でご飯を食べ、子どもと遊び、テレビを見て笑う。関東に住む私たちと何も変わらない日常に突如地震が襲い、すべてを呑み込んでいったのです。私が思う「当たり前に続く日々」は錯覚だったのです。そのお寺の阿弥陀様から問い質されている気がしました。あなたの生き方は本当にそれでいいのか？



真英寺副住職　三浦　雅彦

東京教区（とうきょうきょうく）　報恩講（ほうおんこう）　通夜説教

講題：人と生まれたことの意味をたずねていこう

二〇二四年　一月　二十七日（土）

真宗大谷派東京教区では毎年、練馬にある真宗会館において、報恩講が勤められております。この報恩講の企画として若手僧侶がリレー法話を行う通夜説教があります。

このたび二〇二四年一月の報恩講において副住職が通夜説教の場を頂戴して、お話をいたしました。ここでは、当日の法話のダイジェスト版を掲載いたします。

◆人と生まれたことの意味をたずねていこう

みなさんはこのような疑問を抱いたことはありませんか。最期は死にゆく人生の中で、何を目指して生きればいいのだろう。私の人生のゴールはどこにあるのだろう。

「人と生まれたことの意味をたずねていこう」このテーマを見るたびに思い出すことがあります。昔読んだことのある『夜と霧』という本です。これはユダヤ人精神科医のヴィクトール・フランクルが強制絶滅収容所での過酷な体験から、人生の目的を見出すことがいかに大切かを説く本です。この収容所はナチスドイツがユダヤ人絶滅を目的として作った施設です。この中でフランクルは生きる意味が簡単に剥奪（はくだつ）されるような非人道的な生活を強いられます。彼は言います。人は意味のない苦しみには決して耐えられない。逆に言えば「本当に生きるとは何か」を見出したとき、人はどのような苦しみも担うことができる、と。

◆私はゴールを探しながら生きてきた

『夜と霧』を読んで私は思います。人生の

ゴールは一体どこにあるのだろうと探し求めながら自分は生きてきたと。大学受験を経て、やっと入学したかと思えば、学生生活のゴールは就職だと言われます。履歴書を書き、面接の練習をして就職活動をがんばります。でも頭の奥底で「本当に就職がゴールなのだろうか」といつも悩んでました。どこかで聞いたような言葉を切り貼りして面接に臨んだ結果、三十社から不採用通知。結局たまたま受けた一社から内定をもらい何とかゴールにたどり着きました。会社に入ってからもゴールを探し求めては見失うことが繰り返されました。ずっとゴールを求めて生きてきたけれど、ないのではないかと思えました。こんなになるまで頑張ってるけど、自分が生きる意味はなんだろう？このとき人生で初めて「むなしい」と感じました。当時、私はこの「むなしさ」を外のもので埋めようとしていました。でも一向に埋まらないのです。なぜなら問題の本質はこの私にあったからです。

◆問題の本質とは？

中国の高僧・曇鸞大師という方は、人間の問題は、いまお話ししたような「むなしさ」であると言います。ゴールを求め続けて必死に全力で走り続けるけれど、ゴールがどこにあるかわからないという問題です。まるでハムスターが回し車を必死に回し続けるように。どれだけ懸命に走っても、回し車ですから一歩も進んでいません。どこへ向かって生きていけばいいのかわからない。それでも必死に仕事をして家族を養い続けないといけない。そして老いて・病気を抱え・やがて死を迎えるのです。この世で手に入れた幸せをすべて残して死を迎えるのですから、死はゴールではありません。

いのち終えるときでさえゴールがわからない。だから不安なのです。私たちは死んだらお終いではないのです。生まれ変わり死に変わりしながら、私たちはこのような迷いのいのちを永遠に繰り返すと、仏教は教えるのです。

◆真実の教え―『大無量寿経』

浄土真宗の開祖・親鸞聖人は、この人間の問題を超える道を探された方でした。「むなしさ」を感じるということは、むなしくない世界（真実）を求めていることの証です。親鸞聖人はむなしさを超える真実の教えは『大無量寿経』であるとハッキリと教えています。真実の教えである根拠として、このお経の一部分を引用するのです。そこにはいつまでも覚ることのできない仏弟子・阿難とお釈迦さまが登場します。この阿難は付き人のようにいつもお釈迦さまの身の回りのお世話をしながらお説法を聞いているお弟子です。さらに記憶力が抜群に良かったのでお釈迦さまのお言葉をすべて記憶していました。阿難はお説法をたくさん聞いて、たくさん記憶していたのに、お弟子の中でただ一人覚ることができなかったのです。

◆阿難が見た光り輝くお釈迦さま

その阿難がある日とんでもないことに気がつきます。お釈迦さまのお顔がいつもと違って、光り輝いているのです。阿難はそのことをたずねます。

阿難今日はお釈迦さまのお顔が輝いていますね

釈迦阿難よく聞きなさい　あなたは大変なことに気づきました 私はいつもと変わりません 驚くべきことに、あなたが見た顔の輝きは、覚っている者にしかわからないことなのです

阿難は依然として覚っていません。それにも関わらず、覚った者しか見ることのできない世界を垣間見たのです。お釈迦さまは阿難のこの質問に対してこのように言います。

釈迦阿難よ。あなたの問いは、覚ることができ

ずに迷い続ける、あらゆる人たちが救われる道を問いたずねたのです。

そのようにおっしゃったお釈迦さまは、ひとりも漏らさず救われる阿弥陀仏の本願をこのあと説きはじめていくのです。

◆阿難と親鸞聖人の共通点

親鸞聖人はこのように覚ることができずに苦しんでいた阿難とご自身が重なっていたのではないでしょうか。親鸞聖人は比叡山で二〇年間どれだけ真面目に修行に励んでも、覚ることができないと、絶望しながら比叡山を下りました。自分は今まで一体何をやっていたのだろうと「むなしさ」を抱えていたのではないでしょうか。阿難も同じように何をしても覚ることができずに苦しんでいました。まさに「むなしさ」においてピタリと一致していました。

その阿難に何が起こったのか。それは光り輝くお釈迦さまが見えたのです。あらゆるものが平等に光り輝いている真実の世界を阿難は垣間見たのです。でもそれは覚っていない者には決して見ることができません。起こり得ない不思議なことがこの場面で起こっているのです。

このお話は阿難が気づいたように見えますが、あらゆる人たち（阿難も親鸞聖人も、もちろんこれを読んでいる私たちも）をたすけたいという阿弥陀仏の本願の方から立ち上がって、阿難に見せていたのです。つまり、阿弥陀仏の本願が阿難に届くという形で成就しているのです。お釈迦さまはまさにそのことに驚いていたのです。覚れない者に阿弥陀仏の本願が至り届く。煩悩を抱え迷ったままであっても、阿弥陀仏の浄土へ必ず生まれる願いが阿難によって証明されたのです。そして浄土に生まれる者は必ず仏となるのです。

親鸞聖人はあらゆる煩悩を抱え、迷いつづけるしかないご自身が救われるのは、この『大無量寿経』の教えしかない、真実の教えがここにあると教え示しているのです。

◆あなたの人生の主は何ですか？

冒頭で紹介した『夜と霧』の作者ヴィクトール・フランクルは言いました。もし自分自身が人生の主であるならば、最期の最期は家族・健康・財産・人の役に立つ・人から認められるなどの生きる意味をすべて失い、ただむなしく死んでいくしかない。なぜなら、苦しみの多い人生の中から、何を手に入れることができるのかという視点しか持っていないからです。

そうではなくて、人生がこれからの私に何を期待しているのかという視点に立つことが大事なのだと語ります。つまり、「人生そのもの」「いのちそのもの」が私の人生の主になる。それが本当に生きることであると、フランクルは強制絶滅収容所での体験を経て語っています。

私は人生の主が自分自身だと思って生きていました。それは「私の人生は私のモノ」という視点で人生を眺めることです。そうではなくて私を超えたものが私の主であるという視点に立つことが大事だと言っているのです。先の阿難の話では、その主が阿弥陀仏の本願に当たるのだと思います。

最後にもう一度お聞きします。あなたの人生における主は何ですか？

（文責：真英寺）

YouTube 真英寺法話チャンネル

当日のご法話をお聞きなりたい方は
下記QRコードからスマホ等でご覧いただけます。

https://www.youtube.com/live/XKkQ3UEiDlU?si=ynJSoLJk-bs93lDN&t=2870

真宗会館 通夜説教 検索

お寺の掲示板

あなたの感じているむなしさこそ
真実の世界への強烈なあこがれなのです

米沢英雄

「むなしさ」と聞いてどのように感じるでしょうか？

「むなしさ」をもう少し丁寧に言葉にしてみると「これまで一生懸命に生きてきたけれど、何を残せたのか。何も残せていないのであれば意味がなかったのではないかと不安になること」だと思います。「むなしさ」を感じる瞬間を調査した研究では、満足できる生きがいがない状況で「むなしさ」を感じることが多いようです。具体的には年を重ねてライフステージが変化して、仕事や子育てから解放されて楽になる一方で、社会とのつながりが薄くなると感じるようです。

このような「むなしさ」から逃避するために「一度きりの人生だから思いっきり楽しむ」という快楽主義が現代を生きる私たちにとってなじみの感情になっているのだと思います。私たちの感情のすぐ裏側にはこの「むなしさ」が確実に存在しているのでしょう。

今回の言葉は、身近であるのに私たちが目を背けてしまう「むなしさ」にフォーカスした言葉です。むなしさを感じるのは、他でもない自分がこの世に生まれて、いまここに生きている意味を知りたいから。つまり、本当はむなしくないものを求めて一生懸命に生きてきたはずなのに、人生でむなしさを感じるのはなぜか。これはおかしいのではないか、だからむなしくない世界へ強烈に憧れるのだろうと思うのです。

ここでのむなしくない真実の世界を「浄土」といいます。浄土がどこかにあってそこへ往くという発想ではありません。あなたが感じているむなしさは本当のことを求めているサインなのです。そのサインから目を背けることなく、真向かいになって、生まれた意味をいのちを終えるその瞬間までたずねる、これが「あなたの生まれた意味」なのですと、真実の世界・浄土は呼びかけているのです。

本堂の外壁塗装工事を行いました

本堂の外壁塗装工事をひと月ほどかけて行いました。前回の外壁吹替工事から二〇年以上の歳月が経過しておりました。長年、雨風や夏の太陽光にさらされ続け、耐えてきた塗装もかなり劣化が進んでいたため、このたび吹替工事を行う運びとなりました。工事期間中は参道に足場が設置されていたため、ご不便をおかけいたしました。

次のお墓参りは、色が鮮やかになった本堂にもぜひお参りください。

今後とも皆様からお預かりした大切な浄財は真英寺へお参りされる方々のために役立ててまいります。

工事中の本堂の様子

眞英寺寺報「慈現」第九号
発行　眞英寺（真宗大谷派 京都東本願寺）
東京都新宿区若葉二丁目一番三
TEL　03-3351-5955
E-mail　m-miura@sineiji.jp
URL　https://www.sineiji.jp/